国際親善ニュース

第　3　号
昭和52年12月1日発行
金沢市都市提携委員会
事務局：金沢市総務部総務課
国際親善係　TEL　20－2075

広がる友好の輪

○第３回金沢姉妹都市フェア開催

毎年秋に開かれる「金沢姉妹都市フェア」は、今年もにぎやかに10月７日から同12日までの６日間、金沢名鉄丸越デパート８階ホールで開催され、期間中延べ約４万人が訪れた。

７日の開会式には特別ゲストとして米国商務省駐日政府観光局長フリッツ・M・シュミッツ氏が招かれ、江川助役（市長代理）、油谷提携委員会名誉会長等によってテープカットが行われた。「観光」をテーマとした今回のフェア会場には、各都市、各国の観光名所の写真やポスター、各都市から贈られた記念交換品などが多数展示された。又、姉妹都市別に記念バザールも開かれ、その国の代表的な特産品、民芸品が即売され、人気を博した。このほか今回は特に、姉妹都市を訪れた方々から寄せられた交歓風景のスナップ写真が多数展示された。又、会場の一角には各国の観光映画も常時上映され、国際色豊かな会場は、６日間、連日のように親子連れが目立ちにぎわった。（**写真**は開会式でのテープカット。）

○バファロ親善使節団来訪

バファロから、桜満開の４月中旬、同市姉妹都市委員会Ｃ・ディーボルド会長を団長とし、同会前会長Ｆ・ミード氏および同会事務局長Ａ・クーパー氏を含む20名の親善使節団が金沢を訪問した。一行は、12日の昼に列車で金沢入りしたあと市役所を訪問、岡市長、室井議長らと記念品交換等のセレモニーを行った。さらに同日夕刻ディーボルド会長が金沢のバファロ関係者および銀行関係者を招待し、盛大にレセプションが開催された。翌13日には兼六園での桜見物、県美術館での日本茶賞味、金沢ロータリークラブ例会出席、商工会議所訪問などを楽しみ、その晩は過去バファロを訪問した180名の金沢市民の待つ市民歓迎パーティに臨み再会を喜び合い、友好の輪がさらに広がった。翌14日は一行の希望でフリータイムとしそれぞれ自由行動を楽しみ、その夜は各家庭に民泊した。15日は北陸放送、九谷焼窯元等を見学翌16日の朝小松空港を発った。（**写真**は市長訪問の際談笑する一行。）

○イルクーツク市長一行来訪

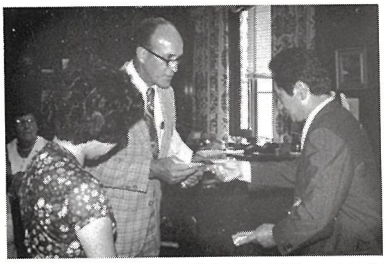
９月３日、　イルクーツクからサラツキー市長一行４名が本市を訪問。一行は、サラツキー市長のほか建築技師のブーホさん、列車車両検査長のデフチャリョーフさん、女性建築技師のシャーブリナさんで、５、６日の両日、富山市で開かれた第６回日ソ沿岸市長会議出席の機会を利用し、本市を親善訪問したもので、３日の市役所訪問の際、岡市長が海外視察旅行中のため江川助役、尾戸収入役、荒木市副議長らと歓談し、両市の反好強化を確認し合った。一行は、６日間の本市滞在中ロシア人墓地参拝、兼六園等の市内観光、能登方面への旅行そして市長招待の夕食会、市民歓迎パーティなどを通して両市間の友好を深め、帰国したばかりの岡市長とも４年ぶりの再会を喜び合い旧交を温めた。又、姉妹都市提携10周年を記念し、通信陸上競技大会開催が協定され、この種の交流は全国的にも珍しく、両市のスポーツ友好強化に大きく役立つものとみられる。（**写真**は握手する両市長。）

姉妹都市へ多数の訪問団

○市長、財務部長バファロ訪問

岡市長と小松財務部長は、アメリカでの２つの国際会議に出席のあと８月24日夜遅くバファロに到着した。空港ではマコウスキー市長、ディーボルド姉妹都市委員会会長をはじめ多数の委員会のメンバーの盛大な歓迎を受けた。翌25日のロータリークラブの昼食会で市長は200人のロータリアンを前に約20分間演説を行った。26日の午前中はディーボルド会長の招待でエリー湖での魚釣りを楽しんだあとその日の晩市長のバ市滞在中のメーンエベントであるアルブライト・ノックス美術館でのバ市姉妹都市委員会主催の市長歓迎レセプションに出席、160人余りのバ市各界各層の市民が参加、市長の姉妹都市来訪を祝し、何度も乾杯が行われた。（**写真**は空港到着時マ市長らに出迎えを受ける岡市長。）

○青少年代表団バファロ訪問



三谷教育委員会庶務課長を団長とする青少年代表団は、バファロ到着の翌日８月11日の午前中市庁舎にマコウスキー市長を訪ね、あいさつをすませたあとディーボルド会長の銀行、デラウェア公園の日本庭園などを訪問、その夜、この４月に金沢を訪問したハドスン氏の新築の豪邸での歓迎レセプションに招かれた。これはバファロ滞在中のハイライトであった。同氏邸の築山や橋などのある日本庭園は一行の来訪のため夜を徹して整備されたように同氏の非常な歓待ぶりに一行は驚いた。そこには約50名のバ市の関係者がそれぞれ夫人、子供連れで金沢の青年に会いに来ており、両市民間の親善友好ムードは深夜まで高まった。一行はお返しに日本民謡や盆踊りを被露した。（**写真**はマ市長を訪れた三谷団長。）

○男子バレーボール・チームがイルクーツクで親善試合

姉妹都市イルクーツク市へ７月29日から８月５日まで男子バレーボール・チーム一行12人（団長、尾戸収入役）が派遣された。これは、イルクーツク・金沢両市間スポーツ相互交流事業の一環で、バレーボール・チームの派遣は今回で３度目であるが、男子チームは初めて。チームの構成メンバーは、電電北陸、県庁白嶺会、専売金沢、長田やまがらクラブの混成チーム。イルクーツクで２試合、ブラーツクで１試合したがそれぞれ３－０、３－１、３－０で完敗。しかし、勝敗はともあれ一行は両市間の友好交流の促進に大きく貢献した。滞在中、サラツキー市長をはじめ体育委員長エルモライエフ氏の温かいお世話で、市内各所の案内、歓迎レセプションが開かれスポーツ交流の絆を固めた。（**写真**は一行と対戦チーム。）

○提携委員会々長ゲント訪問

ゲント・テルノーゼン間運河開通150周年記念式典への招請にこたえ、本市から中村市都市提携委員会々長と辻市議会事務局長が８月19日から21日までゲント市を訪れた。

150年前に小規模な運河が開通し、その後３回にわたる改修工事により1968年に遠洋航路用の船舶が運行可能なまでになり、今や６万トン級の船舶の入港が可能である。ゲント港はベルギーでは、アントワープに次ぐ大きな港となっている。

８月19日にゲントに到着した一行は、翌20日の記念式典に臨み、ゲント市主催の昼食会、そして市内見学、ゲント港視察等の歓迎を受け、ドウペープ市長を始めとするゲント市当局関係者と両市の友好促進について話し合い、21日にゲントを離れた。（**写真**は記念品を交換する中村会長）

○市中央公民館合唱団ゲント親善公演

金沢市中央公民館合唱団は、創立25周年を記念し7月20日、姉妹都市ゲント市で親善公演を行った。

鴻野市会議員を団長とする一行47名は、７月19日から21日までゲントに滞在し、公演は20日の午後８時からゲント市文化センターで開かれた。会場は、500人のゲント市民で埋まり、琴とピアノの伴奏による日本の歌の数々は、聴衆を魅了し、アンコールに応えての２曲のフランダースの歌に盛大な拍手が鳴り止まず、ドウペープ市長は名誉団長の江川助役の手を高々と挙げ、その成功を祝した。公演後、ゲント市民と団員とは、だれかれとなく握手し合い、その楽しい交歓風景は市民と市民の交流そのものであった。一行は、歓迎レセプション、市内見学を通し相互の友好・親善を深め、21日ゲントを離れた。（**写真**はゲント市長に人形を贈る鴻野団長）

○助役一行ナンシー訪問

江川助役と３人の市政記者（森氏、高畠氏、多田氏）が７月16日から18日まで姉妹都市ナンシー市を親善訪問した。

一行は、中央公民館合唱団とともにゲントを訪問した機会に、別にナンシーを訪れたもので、あいにくクウレ市長は公務で不在ではあったが姉妹都市担当助役ブルーゼ・ジュルバン夫人の心温かい歓待を受けた。ヨーロッパの古い歴史を今に伝えるスタニスラス広場周辺の観光や歓迎レセプション等を通して、一行は両市の友情を深めた。又、金沢を訪れたことのある仏日協会々員クランツ博士宅にも招かれるなど市民交流をも深めることができた。又、市役所表敬訪問の際、江川助役からクウレ市長等を金沢へ招待する旨の書簡が手渡され、今後の両市の友好強化が確認されるなど大きな成果を収めた。（**写真**はナンシー市内見学の助役一行）

※※※イルクーツクを訪ねて※※※

金沢市収入役　尾　戸　嘉　博

７月29日、アエロフロートＳＵ696便で日本海をひと跨ぎ、広大なシベリヤ大陸を眼下に見ながら、バイカル湖南端のイルクーツク市を訪ねる。目的はスポーツの親善交流であり、金沢市選抜バレーボールチームを率いての旅である。イルクーツク市、ブラーツク市と転戦、残念ながら３試合３敗の成績ではあったものの、友情交換では大きくリードしたつもりだ。日本人墓地で遥か故国の土を踏むことなく散った霊に、敬虔な祈りを捧げる。非常に良く清掃され整備されている有様を目の当りにし、サラツキー市長の心づかいに強く胸を打たれた。聖なるバイカルに遊び、流刑地の昔に想を馳せる。東京・大阪間の距離に横たわる湖は、深さ1,620米、透明度40米というとてつもない大きさは、正に海洋といったほうが実感である。湖畔のスポーツキャンプ村での交歓は正にクライマックス、幼児から老人までが利用できる大衆施設や、スポーツ専門家ばかりの訓練施設などで、両国の若人達が、和気藹々と友情を交換し合った姿は、国境を越え、思想信条を越えての交わりであり、誠に爽かなものであった。私も市長以下幹部の方々とソ連独特のサウナ風呂（日本のサウナのようなデラックスなものではなく、キャンプ村の林の中の山小屋といった感じで燃料は薪である）で全くの裸の付合いをしたのが印象的だった。この親近感が経済交流という困難な特命の話し合いに若干なりとも役立ったように思えてならない。最後のお別れの挨拶に私はこう云った。「当地を訪問するに当り、10年前に訪ねた人、５年前の人、昨年の人と、多くの訪問経験者に予備知識にと聞いてきました。しかし当地を見聞して市民生活や、都市施設、接遇などが大きく違って、すべてが嘘のように思えます」。サラツキー市長答えて曰く、「今の良い言葉は最大のプレゼントである。２、３年後に訪問される人が貴殿の話を嘘と思うように努力をしたい」。多くの感動と想い出を残して旅は終りに近ずく。ポツンと光る電灯の下で、たった１人手を振るエルモライエフ氏の姿を後に、彼の友情を咬みしめながら我々はハバロフスク空港を離陸した。

※※※ ミニ・レポート ※※※

○ナンシー民族舞踊団来訪

姉妹都市ナンシー市から〝ロンド・ロレーヌ〟民族舞踊団一行32名（団長、オド氏）が８月17日から23日まで本市を訪れた。一行は、市レクリエーション協会の招きで来訪したもので、白いレースの帽子、前かけ、長いスカートのカラフルな衣裳を着た一行は、滞在中、日本海フェスティバル、竪町商店街盆踊り大会、森本民謡祭に特別出演し、市民と一緒に歌い、踊り、大いに国際親善の輪を広めた。又、一行は市内の家庭に民宿し、始めて体験する日本の生活様式に戸惑いながらも、家族と打ち解け市民交流を深めた。市役所訪問、兼六園等の市内見学、海水浴等の楽しい１週間の金沢滞在を終え、23日一行は離沢した。

○バファロ市民との文通交流計画

北陸郵政局と金沢市は、万国郵便連合加盟100周年およびバファロ・金沢姉妹都市提携15周年を記念して両市市民間の相互理解と友好親善をさらに深めるため「バファロ市民との文通による交流計画」を共催で実施した。この企画は４月中旬、金沢を訪問したバ市親善使節団団長ディーボルド氏とクーパー氏に事業の概要を説明し、協力の承諾を得て正式に発足した。５月下旬から約１か月間各広報機関を通じて金沢市民に対しバファロ市民との文通希望者を広く募集したところ240通の応募があった。６月25日には、金沢中央郵便局でこれらの手紙をバファロに発送する記念式典が開催され、240通の手紙に金沢市長、金沢市都市提携委員会会長のメッセージを添えてバファロへ一括して発送された。これに対し７月中旬バファロを訪問した金沢市青少年代表団がクーパー氏から237通の手紙を持ち帰り、金沢の文通希望者に配布された。その後９月にはさらに140通あまりの手紙がバファロから寄せられた。（**写真**は記念式典）

○北陸放送海外研修団がバファロ訪問

北陸放送は、開局25周年を記念し姉妹局のバファロ市のＷＢＥＮ社へ初の研修団６名（団長、吉田報道部長）を派遣した。10月５日にバファロに到着した一行は、先ず市庁舎にマコウスキー市長を表敬訪問し、岡市長のメッセージを手渡し、なごやかに歓談した。６日は、ＷＢＥＮ社で終日研修を行い、放送システムについて相互に真剣な質問があいつぎ、両社の技術等の交流の第一歩を固めた。又、滞在中、前バ市姉妹都市委員会々長Ｆ・ミード氏宅等への招待、ナイアガラ瀑布見学、又、一行のため歓迎パーティが盛大に催されるなどバファロ側の歓待は大変温かいものであった。３日間の滞在を終え一行は、10日バファロを離れた。（**写真**はマコウスキー市長を囲んで。）

○交換留学生村田君ナンシーへ出発

姉妹都市ナンシー市へ派遣する第３回ナンシー派遣交換留学生に金沢美術工芸大学４年の村田真樹君（23才）が決定した。今回の公募にはフランス語の会話能力を有す市内在住の大学生13人が応募し、面接等の厳正な選考の結果、村田君に決まったもので、本市から旅費の一部45万円が支給され、ナンシー市からは留学中、月1,200フランが支給される。渡仏を前に、10月末、市役所へあいさつに訪れた村田君は、「留学先のナンシー国立美大で専門の工芸デザインを勉強しながら、両市の友好をも深めたい。」と抱負を語った。

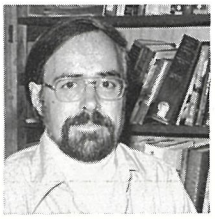
○オーバーストラーテン神父来訪

姉妹都市ゲント市近郊に在住のオーバーストラーテン神父が８月８日、姪のジャイスさんを連れてひょっこり本市を訪れた。同神父は姫路市に長い間住んだこともあり日本語はペラペラ。本市からゲントを訪問する人のほとんどが同神父の通訳でお世話になっており、本市滞在中は、江川助役をはじめ関係者多数の歓待に驚いた様子で、なつかしい対面に一人一人とユーモアを混えて歓談。又、滞在中の宿泊を申し出た寺町の石田さん等、金沢市民の心温かいもてなしに目をうるませ、３日間の楽しい滞在を終え10日に離沢した。

○ブラジル石川県人会設立40周年

ブラジル石川県人会（会長、山本善造氏）が設立され、今年で丁度40周年を迎え、現地サンパウロ市で盛大に催された記念式典に本市から祝金として20万円を送金し、今後の発展を祈念した。

プロファイル



ジョン C・ケンプ氏
（金沢大学外国人教師）

1942年マサチューセッツ州フィッツバーグ生。
1964年ハーバード大学卒業後、５年間教師。
1975年ペンシルバニア大学博士課程修了。
アメリカ文学専攻。35才。

金沢大学の姉妹校、ペンシルバニア大学から昭和50年６月に派遣され、現在、法文学部等の英語担当教師として学生から大変慕われている。金沢の印象は？「日本の古い伝統・文化が残っており、すっかり気に入った。」とお寺を見学したことなどを楽しそうに語る。アメリカと日本の学生の違いは？「アメリカの学生は、direct（直接的）な言い方をするが、日本の学生は、極めてpolite（ていねい）である。」と評す。逆に言えば、日本人は、ＹＥＳ、ＮＯをはっきり言えないということかも知れない。日本の英語教育について「会話力は、劣るが教育方法の云々よりも日本語と英語には全く類似性が無いからで無理もない。」「日本人は、英語がヘタであると言う人がいるが、私は決してそう思わない。読み方、英作文の能力は全くすばらしい。」と大いにほめる。「将来、もっと多くの外国語が大学あたりで教えられるなら、Internationalな語学感覚も身につき新しい道が開けるのではないか。」と教育者らしく熱心に語る。国際交流に大切なものは？「まず、language（言葉）です。そして相互理解です。」と強調。真面目で、誠実そうなアメリカ人である。ジョイス夫人と子供２人の４人家族。趣味はテニス・スキー。大の相撲ファンで貴ノ花が大好きと言う。市内石引在住。

ロンド・ロレーヌを受入れて

竪町商店街振興組合総務理事　桜　井　和　美

姉妹都市ナンシー市から民族舞踊団〝ロンド・ロレーヌ〟がこの夏、竪町で民宿することになりました。当初、生活様式の異なるフランスのお客様とあって大変心配いたしました。しかし、その心配も一行がマイクロバスで竪町に到着すると一度に忘れました。明るい笑顔、親しみ深い瞳、牧歌的な民族衣装、庶民的な私達の交流の中ですっかり打ちとけ、話しも身振り、手振りでまあまあ。街中をフランス国歌を歌いながらパレードし、市民に手を振り、握手をし親善の輪を広げて行きました。中央広場で、ロレーヌ地方の民族舞踊。夜ともなれば兼六民謡会の皆さんの歌で、市民と一緒に炭抗節、百万石音頭など楽しく盆踊りの一夜を楽しみ、各家庭に分散し、想い出の一夜を過ごしました。

食事をしながらフランスの家庭の話し、ロレーヌ地方の風景などをゼスチュアーたっぷりに語り、夜遅くまで親交を深めました。出発の前に日本の茶道のお手前の席をもうけましたが、慣れない手付きで茶わんを持ち、しびれる足を我慢して座っている様子は真剣そのものでした。翌朝のお別れの際には、肩を抱き合い、固い握手を何度も何度も繰り返し、中には涙さえ浮かべて別れを惜しみ合う姿が見られました。ナンシー市の皆さんを迎えてこんなにも人と人との友情が芽生え、国際親善のお役に立てたことを心から喜んでおります。

事務局だより

○クリスマス・カードを出しましょう

今年もChristmas Seasonが近づいておりますが、外国のお友達にもうChristmas cardを出されましたか。日本では、正月に一年の最大の慶祝の意を表わしますが、キリスト教の西洋諸国ではChristmasがこれに相当します。そこでChrismas cardの書き方の幾つかを紹介したいと思います。

1　クリスマスだけのあいさつ文
- ○(I wish you) a Merry Christmas
- ○With Best Wishes for Christmas
- ○I wish a joyful Christmas from the bottom of my heart.

2　クリスマスと新年を兼ねたあいさつ文
- ○A Merry Christmas and a Happy New Year(to you)
- ○With my best wishes for a Merry Christmas and a Happy New Year
- ○Season's greetings and Best wishes for the New Year

市販のカードには上述の文章が既に印刷され、下に自分のサインをするだけのものもありますが、自分で書くのも又、面白いものです。Christmas cardは12月始めからChrismas までの間に相手に届くようにしたいものです。その点、日本の年賀状が元旦以後に届けられるのと逆です。Christmas cardは勿論のこと、絵はがきなどでちょっとした時候のあいさつ文を出したりすることが大変、相手に喜こばれるものです。

○姉妹都市パンフレット出来上がる

本市は、海外５都市と提携しているが、各都市との提携経過、交流の歴史などを写真を入れて紹介した「都市提携のあゆみ」を1,500部作成し、一部は既に市内の関係団体、各姉妹都市、国内各市へ贈られた。Ａ５判、84ページのこの冊子は、これから姉妹都市を訪れる方に必要な知識を得ていただくためにも便利で、姉妹都市親善を深める上で役に立つものと期待されている。

○特別名誉市民章

本市では、親善その他の面で本市と特に関係の深い外国人に金沢市特別名誉市民章＝**写真**を贈呈しているが、これまでにバファロ市長とイルクーツク市長が受章している。この章は、森嘉紀金沢美大教授によってデザインされたもので、金沢の市木「梅」を表現する直径約５cmの七宝仕上げ。中央に金で金沢市章を配し、清純な白梅がそれを包んでいる。梅の葉は、四方八方への発展と緑の街「金沢」を象徴しており、綬のオレンジ色は緑を育成する陽光と活動力を示している。

○編集後記

◎師走に入り、何となく慌しい毎日ですがこの一年振り返ってみますと沢山の交流がありました。紙面の都合で載せませんでしたが、７月にナンシー近郊のツールから青少年コーラス隊が来訪し、市民にその美しい歌声を披露したことがきのうのことのように思い出されます。又、本号編集中の11月にゲント市長が来訪されましたが次号でお知らせする予定です。

◎最近、金沢に長期滞在する外国人が増えておりますが、今回からこうした方々にインタビューし、卒直な意見を伺い、その方の横顔を紹介する「プロファイル」欄を新たにもうけました。